

令和7年度 歴史・文化探訪の会（報告）

梅雨の候、皆様にはご健勝にてお過ごしのこととお喜び申し上げます。

さて、先日5月18日（日）に実施しました第38回探訪会「知多木綿の里 岡田と博物館見学」並びに令和7年度総会について、ご報告をさせていただきます。

心配された天候も、雨にはならず、無事探訪会を実施することが出来ました。探訪会を振り返ってみます。

10時15分頃、名鉄朝倉駅に参加予定の15名全員集合、迎いのバスに乗車し岡田地区へ向かった。15分ほどで知多市観光協会（岡田まちづくりセンター）前に到着、ガイド（木綿のふる里岡田街並みガイド）から挨拶と岡田の街の紹介を頂き探訪会を開始した。

ここで、「知多木綿の里 岡田」の歴史について記します。

関ヶ原の戦いの後、慶長11年日長郷の3か村が統合し岡田村が誕生した。当時の人口は700人、石高689石で、農家の副収入として木綿の機織りが始まっていた。この地域は傾斜地が多く木綿栽培が適していた。以前は麻を栽培し布を作っていたが手間がかかり、一方木綿は栽培も容易で半年でできることから、次第に増えていった。生産した生白の木綿は、伊勢に送られて「伊勢晒」「松阪晒」となって江戸へ送られていた。

「知多木綿」と「知多」の名が付けられたのは、江戸中期の天明年間（1781～88）、中島七右衛門らが晒技術を導入してからである。このころ知多では、女性の仕事として、糸車を回して糸を紡ぎ、機を織り、また自家用に藍染めをして縞木綿を織っていて、「機を織れないものは、嫁に行けぬ」といわれたほど、どの家庭でも行う手仕事のひとつとなっていた。知多の手織り木綿の風合いは格別で、品質の良い「知多晒」の名は江戸でも評判を呼び、いつしか「江戸送り日本一」と呼ばれるようになった。

岡田は荷の集荷地でもあった。当時は牛や馬で運搬したので、郷中の石垣には牛や馬をとめた金具が今も残され、往時をしのぶことができる。

そして「知多木綿」の名が名実ともに注目されるようになったのは、幕末から明治にかけてのことである。明治25年頃からは外国製の織機が導入され、工場生産の時代を迎えた。岡田の竹内虎王は動力織機を発明、明治34年に織物工場を創業し生産向上に力を注いだ。県外からの女工も多く、故郷への仕送りや便りを送る郵便局も明治35年に建てられた。現在も当時の姿で営業をしており、県内最古級の郵便局である（平成25年、国の登録有形文化財に指定される）。

大正8年には人口4300人、31工場と増加し、町は若い女工達で賑わった。昭和4年には新道ができ、木綿工場や商店が増え、街の姿が大きく変わった。昭和30年代まで知多木綿生産の中心として、知多半島の生産の70%を取り扱っており、最盛期には3000人も女工が働き、芝居小屋”喜楽座”なども建てられた。

昭和17年（1919年）戦争の激化に伴い、国策で大半の織物工場が軍需工場に転用させられた。戦後はほぼゼロからの出発になったが、経営者の努力により再び輸出産業の花形として、昭和30年代まで知多木綿の中心地として繁栄した。

しかし、その後は周辺国に追い上げられて、衰退を余儀なくさせられ、現在木綿の国内自給率は1%、織物工場の象徴だった「のこぎり屋根」の建物も消えてしまった。

現在はかつての繁栄を想像するしかないが、最盛期には知多木綿の7割が扱われたことから、岡田が「知多木綿のふる里」と呼ばれるようになった。

ガイドの説明の後、二手に分かれ（ガイドそれぞれ2人付く）街並み散策を開始した。階段を上り、石小川沿いに歩き、5分ほどで最初の見学地、慈雲寺に到着した。

慈雲寺は1350年（観応元年）宮山城主であった一色範光が創建したもので、境内には範光の墓もある。承応4年（1655年）の火災で本堂や宝物が焼失したが、万治3年（1660年）には寺尾直龍によって本堂が再建された。江戸時代後期に編纂された地誌「尾張名所

図会」にも慈雲寺が描かれている。知多四国第 72 番札所。

岡田の街はこの慈雲寺の門前町として発展したということである。境内を見学し、願いが叶うという抱き地蔵を、本日の会の無事を願って胸に抱えた。

慈雲寺の正面階段を降り、門を出る。そこが太郎坊の信号で、その正面 50 m 程の広い道路が「お祭り広場」といわれ、春祭り（4 月中旬）には 3 台の山車が揃い、賑やかな祭りになると言うことであった。

その「お祭り広場」を突き当たりまで進み、町並み散策に入る。最初に旧中七木綿本店の外観（大正 4 年建築）を見学した。その後細い道沿いに歩き、旧竹内虎王邸、旧竹中商店と蔵及び石垣の手綱掛け（荷馬車用）、旧知多貯蓄銀行、中谷屋敷秋葉社、知多岡田簡易郵便局（町並み保存活動の原点）等を見学し、手織りの里「木綿蔵・知多」（明治後期 竹内虎王が建てた木綿蔵）に到着した。ここで隣のなまこ壁の蔵の見学後、建物の中に入り、機織機や木綿の織物（無地、模様入り）や綿糸（晒さないものと晒したもの）、機織りの実演の様子等見学した。

見学を終わり、ガイドとはここで別れ、予約時間が迫っていたことから、梅檀の薄紫の花が咲く川沿いに歩き、昼食会場の範丈亭に向かった。始めに 10 分ほど総会を持ち、平成 6 年度会計報告、今年度の役員について了承を得た。その後昼食を摂り暫し歓談の時間を持った。

昼食後「木綿蔵・知多」に戻り記念撮影、しばらく自由行動とした。地ビールが味わえる「S o N」に向かう方もあった。13 時 10 分には「おかき屋辰心」（土産物店）の駐車場に集合し、バス乗車、次の見学地「知多市歴史民俗博物館」に向かった。

13 時 30 分ごろ知多市歴史民俗博物館（ふゅうとりい・ちた）に到着、玄関に入り、始めに学芸員から挨拶・説明を受け、学芸員の先導で常設展を 1 時間ほど見学した。まず展示室 3、4 で、この地域の縄文時代から古墳時代の土器・道具などの出土品、明治から昭和までの冷蔵庫・アイロン・こたつ等の生活用具の展示を見学し、続いて展示室 2 へ行き、知多木綿の工程・歴史の紹介・生産用具等を見学した。

続いて、漁業をテーマにした展示室 5 へ行き、舟や使用された道具を見学した。打瀬船の実物展示は圧巻で、日本で唯一残っている実際に使われていたもので、名前を「藤井丸」と言い、全長 15 メートル、帆柱の高さ 12 メートル、幅 3 メートルで、間近で見るその大きさに驚かされた。幡豆郡一色町の栄生漁港からの寄贈で、昭和 30 年頃から 20 年近く活躍したと言う。帆に風を打たせながら船を横流しにし網を引く打瀬網漁は、非常に効率が良く、伊勢湾における漁業の主力であった。主に車エビやカレイ、蟹などを漁獲していた。漁撈用具（オゴノリや鳥貝を採る万牙（まんが）等）やのり養殖に使用された道具（海中下駄等）も見学した。

続いて隣の農業とくらしがテーマの展示室 6 に移動、農作業に使う道具、副業として行われていた養蚕や漫才の紹介を見学した。

知多半島は大きな川がなく、降雨量も少なく、昔から稲作に必要な水の確保に多くの努力を払ってきたと言う。溜池を多く作って田地へ水を引いたり、野井戸を掘りはねつるべを使って水をくみ上げたりした。永年のこの水の苦しみも、昭和 36 年に通水した愛知用水によって解消されたのであった。

見学を終わり玄関に戻る。玄関カウンターには生きた蚕も展示されていた。学芸員にお礼の挨拶をし、14 時 30 分頃探訪会を終了した。その後徒歩で朝倉駅へ向かい、各自家路に就いた。

